



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | J. J. コリンズ著、山吉智久訳『「死海文書」物語』                                                       |
| Author(s)        | 山我, 哲雄                                                                            |
| Citation         | 基督教學, 56-57, 54-57                                                                |
| Issue Date       | 2022-11-28                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/92835">https://hdl.handle.net/2115/92835</a> |
| Type             | journal article                                                                   |
| File Information | 07yamaga.pdf                                                                      |



書 評

第1部第1章の論評だけでもはや紙数が尽きたが、著者が一番こだわった章でもあり、聖書学を専門とする評者の応答責任もここにあると考えた次第である。本書の残りの部分、とくに『エウセビオスのカノン』を扱う第5章やトマス福音書の翻訳(第6章)からは多くの事柄を教えられるし、古代キリスト教を扱う第2部も非常に示唆に富む。

J・J・コリンズ著、山吉智久訳  
『死海文書』物語—どのよう  
に発見され、読まれてきたか』  
(教文館、二〇二〇年)

山我 哲雄

1946年後半か1947年の初頭に死海のほとりのクムランの洞窟で偶然発見された死海文書は、それまで知られていなかった紀元前後のユダヤ教の多様なあり方に光を当て、またキリスト教の成立の謎を解くうえでも鍵になるものとして、世界中の注目を集めた。それだけではない。それが世の終わりの近接を前提とした強烈な終末論を含むものであったために、ジャーナリズム等に興味本位で取り上げられ、最初の段階で復元、解説の作業に当たったスタッフにカトリックの司祭が多かったこともあり、カトリックにとって不都合な事柄が多数書か

れているのでバチカンの命より肝心の部分が隠匿されている、などという陰謀論まがいの言説も流布したりした。

その後、発見された文書のほとんどが公刊され、またオンラインを通じてその写真版が公開されて誰でもアクセスができるようになったことや、堅実な研究が数多く出版され、文書の内容が正確に知られるようになったこともあり、死海文書に向けられる目はより冷静なものになりつつある。しかし、わが国ではこのところ、死海文書に新たな注目が集まりつつある。これまで死海文書の邦訳と言えば、聖書学研究所編で主要なものを集めた一巻本（『死海文書』山本書店）しかなかったのだが、聖書写本を除き文書の形をなしたほとんどのものを網羅した十二巻予定の『死海文書』のシリーズが、東京の小さな出版社ぶねうま社から刊行されはじめたからである。今回、このシリーズにも訳者として加わっている（評者自身もそうなのであるが）北星学園大学の山吉智久氏により、―このシリーズとは独立してであるが―死海文書全体を紹介するよい概説書が翻訳出版されたことは、まさに時宜にかなったことである。

本書の著者J・J・コリンズは1946年アイルランド生まれの聖書学者で、イエール大教授。旧新約中間時代のユダヤ教の専門家で、浩瀚な『ダニエル書』注解でも知られている。死海文書関係でも、学術誌『死海での発見 (Dead Sea Discoveries)』や『オックスフォード死海文書ハンドブック (Oxford Handbook of the Dead Sea Scroll)』の編集者を務めており、死海文書自体の公刊作業にも参加している。まさに死海文書の表も裏も知り尽くした人物である。

本書は七章からなり、第一章「死海文書の発見」は、ベドウィンの少年たちによる偶然の発見から、写本群が欲の皮の突っ張った商人たちや聖職者たちの手を転々とした末、ヘブライ大学に買い取られるまでの顛末を辿るとともに、解説チームがどのように編成され、公刊作業が始まったかが記される。その際に、死海文書の発見地が当時ヨルダン王国に属しており、ヨルダン政府の反対でユダヤ人の研究者がチームに加えられず、結果的に研究や解釈の方向に偏りが生じたことを、評者は本書で初めて知った。第二章は「エッセネ派」で、死海文書は

その内容から、フィロンやヨセフスの著作に言及されるユダヤ教の分派エッセネ派によって書かれたものと推測されることが多かったが、これに反対する声も少なくなかった。この章では、賛否両論のそれぞれのポイントや問題点(文書の黙示思想的傾向や宗派の独身制の問題等)が手際よく整理され、結論的にはエッセネ派文書である可能性が高く、「他の代案は考え難い」とされている。第三章は「クムラン遺跡」で、死海文書が発見された洞窟のそばで発掘された、沐浴用と目される多くのプールを含む建物群の遺跡が扱われる。当然問題となるのは、クムラン遺跡＝クムラン宗団の居住地＝死海文書の成立地と言えるかどうかということである。特に、清浄を重視した宗団の遺跡に大規模な墓地が隣接していたという事実と、その墓地に女性も埋葬されていたことが問題なる。ここでも賛否両論が丁寧に検討された結果、著者はほぼこの等式を認めるという穏健な結論に達している。

第四章は「死海文書とキリスト教」で、死海文書の発見後最も注目を集めたトピックである。原始キリスト教とクムラン宗団には終末論やメシア期待、水による清め

など多くの共通性があり、キリスト教文化圏である欧米で、死海文書とクムラン宗団がキリスト教の先行形態と見なされたり、両者の間に直接的な影響関係が主張されることも怪しむに足りない。極端な場合には、洗礼者ヨハネやイエス自身がクムラン宗団に属したとされたり、死海文書に言及される「義の教師」や「悪しき祭司」と同定されることもあった。しかし、ここでも著者は慎重であり、両者は紀元前後の黙示的ユダヤ教における「共通の文脈」に属したにすぎず、「類似点よりも相違点の方が顕著」であるとしている。第五章は「死海文書とユダヤ教」で、死海文書とファリサイ派、サドカイ派などの既存の宗派やラビ・ユダヤ教との関係が問題にされる。発見当初は、死海文書に見られる二元論や終末論など、既成の宗派との違いが「一方的」に強調され、ユダヤ教の黙示思想の中に死海文書を位置づけ、それが後のキリスト教にも繋がったと論じられることが多かった。

しかし、その後の研究により、クムラン宗団がエルサレム神殿から分離した理由は、黙示思想や大祭司の正統性をめぐる論争ではなく、暦の違いや祭儀法の細かい解釈

―特にその厳格さ―の違いによるものであることが明らかに  
なってきた。著者によれば、黙示主義とトーラー遵守は「死海文書の中で補完しあっている」。それゆえ死海文書は、「ラビ・ユダヤ教へとつながるトーラーの意味をめぐる議論の記録」として見ることも可能なのである。第六章は「死海文書と聖書」で、死海文書の発見により、従来知られてより一〇〇〇年以上も古い写本が得られたこと、そのテキストが今日標準的とされているマソラ本文よりもサマリヤ五書や七十人訳に近い形を示すことが多く、前一世紀前半にはテキストの形がまだ流動的であったこと、聖書の文書を敷衍したり書き直したりする聖書の「再話」の試みが盛んだったこと、預言書（および詩編）を同時代の宗団の状況に直接関連付けて解釈する「ベシエル」と呼ばれる注解書がいくつも書かれていたことなどが紹介される。第七章は「死海文書をめぐる争い」で、文字通り、死海文書の解説や公刊に関わった人々―および関わらせてもらえなかった人々―の間での、資料独占問題、資料不正使用問題、業績盗作問題、名誉棄損問題、なりすましメール中傷問題などを回

る論争や訴訟の話である。著者が「まえがき」に書いているように、学者たちの世界が決して「原罪から解放されていない」ことを改めて認識させられる。それにしても、死海文書の関係者には、躁鬱病患者、アルコール依存症患者、「キノコ教」唱道者、元ナチ、反ユダヤ主義者、訴訟マニアなど、問題の多い人物が実に多い。だからこそ、面白い「物語」になるのだろう。

訳文は丁寧かつ周到で、読みやすい。ただ、著者（コリンズ）自身の見解なのか、紹介されている個々の論者の見解なのかが分かりにくい部分があり、識別できる工夫があるのとよりよかったと思われる個所もある。訳者の労を多するとともに、死海文書の全貌を知るうえでよい概説書が出たことを喜びたい。